

教育計画と個性



福田香代子

小さい子どもほど個人差が多いと言われているが、教育的な集団の中でも最も年令の低い者の集りである幼稚園、保育園にはこのことばがよくあてはめられると思う。実際に一組の子どもを扱つてみると、はじめのうちには似たような体質で、似たような感じと思っていた子どもが、だんだん一人ひとりについて知つてゆくにしたがつて、似たようなところがあるどころか、全く身体的にも性格的にも独自のものを持つている個々の子どもが見出されて、共通している面や似ているところを探そうと思っても見出すことが出来なくなってしまう。

一人として同じでないこれら個々の子どもの幾人かを一しょにして保育してゆくわけであるが、保育の計画を立てるにあたつ

てどういうことを心にとめてせねばならぬか考えてみたいと思う。子どもたちには同一の発達、同一の行動、同一の成就を期待することは出来ない。それ故、組の中の人ひとりの幼児の欲求に応じてそれぞれの子どもの特性が生かされ、おのおの十分活動がおこなわれるよう計画を立てなくてはならないわけである。一人ひとりの子どもについての保育計画を考え、一人ずつについて実行していくことが出来るならば、それこそ最も個性に応じた教育が出来るわけであるが、それではせつかくの集団生活の意味も無くなってしまうので、結局その年令の子どもたちの発達の標準的なものを基礎として一筋の保育計画を立て、実行するにあたつて一人ひとりの子どものことを

配慮しながら、ある子どもはその特性をよりよく生かしめ、またある子どもには適応することを邪魔している障害をとり除くようにしてやらなければならない。それにはまず教師が子ども一人ひとりについて良く理解し、知ることが必要になってくる。

大部分の幼児は幼稚園に入園するまでは、その生活範囲はほとんど家庭の中に限られ、接觸している人も家族だけであることが多い。それ故、家庭環境、家族関係、また家庭におけるその子どもの位置は、一人の子どもを知るに於いて重要な部分となつてくると思う。現在ある子どもをそこまで成長せしめた外部的なものを知り、その子どもの今ある場を知ることによつて、子どもの個性がいくらか浮き出てくると思う。しかし、一番大切なことは、教師が子ども自身を観察し知ることである。集団生活に対する適応性、友だち関係、新しい事にぶつかった時の処し方、集中力、興味、遊びなど、あらゆる面にわたつてよく知り、その子どもの立体的な全面的な像をしつかりつかまなくてはならない。子ども一

人ひとりの像をとらえて後にそれぞれの像に合わせて教育がおこなわれ得ると思う。

Y男は入園当初から非常に活発で、二年保育の年少組であるが、組の中でも生年月日が一番早く、知識や言語の発達も豊かで、はじめから目出つ存在であった。その為一番早く組中の友だちから人気を集めて中心的人物となり、自分もその事を意識していくようになつた。彼は、話を聞いたり、話し合つたりする時はなかなか集中出来ず、自分の気にいったことないと落着いておらず、他の子どもにかまつたり、調子のはずれた行動をして、断えず注意していなければならなかつた。現在は父母との三人暮しであるが、父は会社に行つてゐる為、日中はほとんど留守で帰宅は比較的遅い為、家にいる間中母と過している。異母兄が一人別居していて、相当年令が離れてゐるが、Y男にはとても優しく、秀れた兄だと言う。母はY男のことにのみ明け暮れしている様子で、彼の一挙手、一投足に気をつけており、ほとんど外に出して他の子どもと遊ばせるということではなく家の中に

閉じこまるかのようにしておくか、たまに外に出ることがあると窓から眼をはなさず見ついて、すぐに呼び入れなければ心配でいられないといった状態だった。Y男自身は、非常に勝気な一面照れやすく、他の子どもに出来て自分には出来ないことがあ

るとそのことが承知出来ず、どなつたり乱暴な行動をしたり、ふざけたりしてまぎらうとするところもあつた。しかし、友だちをひきつけて、リードしてゆくことが出来、友だち関係はスムースでだいたい誰とも遊び、落ちついている時には物事の理解が早いという面もあるので、良い特性を損うことなく、友だちが自分よりも優れていることでも否定的でなく受け入れ、自分が気に入らない事でも忍耐強く集中し、出来るようになるようにしてみることが出来るようになると考へた。そこで、組の中で

手には相手なりに尊敬すべきところが認められ、同時に今まで自分があまり興味を持っていたいなかつた為に集中出来なかつたこともにも注意をむけられるようになつてきた。家庭でも自分より少し年上の子どもと遊ぶようになり、着換えが出来るようになつたなどから今までと違つた意味の自信が出てきて、他の子どもの注目を保とうとしての調子はずれな行為をしなくなつた。二学期

幼稚園でのグループ活動として、一枚の紙にグループの子どもが一しょに絵を描いていて、道をつづけている時偶然隣りの友だちのとぶつかって道がつながり、その友だちも自分と同じようなことが出来るのを知り、自分は洋服のボタンをかけられないがその友だちは出来る、けれども自分は汽車が上手にかけるというように、それぞれ相手には相手なりに尊敬すべきところが認められ、同時に今まで自分があまり興味を持つていたいなかつた為に集中出来なかつたこともにも注意をむけられるようになつてきた。家庭でも自分より少し年上の子どもと遊ぶようになり、着換えが出来るようになつたなどから今までと違つた意味の自信が出てきて、他の子どもの注目を保とうとしての調子はずれな行為をしなくなつた。二学期

になつてからは、今までふざけて全然しようとしなかつたりズムも一生懸命出来るようになり、新しく組みかえた比較的積極性のある年令も近い子どもばかりのグループの中でも、他をも受け入れて上手にやってゆけるようになつてきた。

Y男の場合は注意したいと思う点に直接

ふれずに間接的に良い方を強調して、自分で気付いてゆくようにという方法をとったが、子どもによつては、このやり方では効果が上らないこともある。子どもによってそれぞれ異った方法をとつてゆくわけであるが、どのような場合でも最もよく注意しなくてはならないのは、その子どもの成長の波に乗つて、速度に合わせてしているかということである。せつかく伸びてきてるもの、本来持つている良いものを曲げてしまつたり損ねてしまつたならば、個性教育の意義は無くなつてしまふと思う。

あらゆる機会を通じて幼児と共に学び、共に生活して子どもを良く理解し、忍耐心を持つて実行してゆくことこそ、個性に応じた教育をなし得る根本だと思う。(東京)

個性に応じた教育

青木道代

個性とは、私はそれを人間一人ひとりが持つてゐる人格性として理解したいと思います。Aという人間はAという人間として、何をもつてもかえることの出来ない尊さをもつて、彼の場を占め、何人もおかすことの出来ない彼らしさを彼の責任において主張している、BもCもDもこの地上にあるすべての人間が持つてゐる、また平等に主張すべき個々の人間性、これを個性と言つてよいのではないかと思ひます。

現代日本の社会において、教育の問題は渦をなして私たちを押し流そうとしています。勤務評定、道徳教育の問題、教案の画一化、すし詰め学級などと。こうした問題は直接、間接に、また現在において将来において私たちの問題であり、すし詰め学級

の嘆きは地方の幼稚園保育所にとつては小中学校以上のものがあります。こうした教育の画一化、教師の不足、設備の不備といふ荒波の中で私たちは今こそ思いをひそめて子どもたち一人ひとりのことを考え、個々の幼い魂と語り合わねばならないと思ひます。百匹の中の迷える一匹の羊、それは画一化した教育企業の目からみれば百分の一の価値しかないかもしれません、私たち子どもを愛する教師、父母の目には、十九匹をおいてもその一匹をさがし求めねばやまない尊いものにもかえがたい価値を持つてゐるはずです。百人の子どもたちの一人ひとりが、そのような尊さを持つて私たちの心に受け入れられる時にはじめて私たちと子どもとの深い人格的な交わりが